OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	徳島県海部郡方言の可能表現
Author(s)	渋谷, 勝己
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2000, 2, p. 63-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23179
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

徳島県海部郡方言の可能表現

渋谷勝己

【キーワード】副詞エー、文法調査法、移住、言語接触、文法体系の再編成

1. はじめに

本稿は、以下の三つの目的をもってなされた調査の中間報告である。

A. 当該方言に残る副詞エーの意味記述

B. インフォーマントの属性と言語変化の相関

(b-1) 属性(1)：年齢

(b-2) 属性(2)：外住歴と文法体系の単純化

C. 文法記述の方法

(c) 調査法の違いによるデータの種類

いずれもまだ試行的、思弁的な段階にあり、今後の網羅的な調査が必要とされる。

2. 調査の概要

調査の概要は以下の通り。

(a) 調査日時：1999年3月

(b) 調査場所：徳島県海部郡海南町若松・神野

(c) インフォーマント（いずれも徳島県海部郡海南町出身）

Ｓ：昭和13年生、M、外住歴なし、面接調査

Ｏ：昭和13年生、Ｆ、徳島県板野郡（19-21）・愛媛県新居浜市（21-）
アンケート調査

Ｉ：昭和42年生、Ｆ、大阪府大阪市（18-25）・徳島県海部郡海南町（25-）
アンケート調査

(d) 調査項目：可能文を中心に、関連項目を含めた54項目（可能の47項目のみ表１・表２に記載）

(c)のインフォーマントについて、ＯとＩは外住歴があるという点で共通し、Ｉ（活躍層）は年齢においてＳ・Ｏ（壮年層）と対立する。ＳとＩには現在、家で使うときのことばを尋ね、Ｏには、海部郡に帰省したときに使うことばを尋ねた。外住歴のない活躍層の調査は行っていない。なお、調査法については、Ｓのみ面接調査を行い、他はアンケート調査を行った（「まとめ」の表３参照）。

調　　査　　文	可能の条件	動作実行の含意
現　　在　　否　　定		
(1) 夜のお墓なんてこわくて一人で行くことができない	心情	潜在
(2) ラブレターなんてはずかしくて書くことができない	心情	潜在
(3) うちの妹ははずかしがりやだからラブレターなんて書くことができない	心情	潜在
(4) 太郎ははずかしがりやだからラブレターなんて書くことができない	心情	潜在
(8) こんな波の高い所ではこわくて泳ぐことができない	心情	潜在
(9) あの大きな犬がいるところに来ると足がすくんでしまって先へ行くことができない	心情・状況	潜在
(10) その川は汚いから泳ぐことができない	心情・状況	潜在
(11) 私は生れつきからだが弱くて泳ぐことができない	能力	潜在
(12) 太郎は生れつきからだが弱くて泳ぐことができない	能力	潜在
(13) 私は海で10メートル以上はもぐることができない	能力	潜在
(14) 「ユウウツ」なんていう字はむずかしくて書くことができない	能力	潜在
(15) こんなに重いものは持ち上げることができない	能力	潜在
(16) 練習しているけどまだ100メートル以上は泳ぐことができない	能力	潜在
(17) 人間は空を飛ぶことができない	能力	潜在
(18) ペンギンは空を飛ぶことができない	能力	潜在
(19) この橋は10トン以上の重さをささえることができない	能力	潜在
(20) このクレーンは30トン以上のものは持ち上げることができない	能力	潜在
(21) この鉛筆けずりはきれいにけずることができない	能力	潜在
(22) 私は道がわからないから会場まで行くことができない	心情・能力	潜在
(23) 太郎は道がわからないから会場まで行くことができない	心情・能力	潜在
(28) 今日は体調が悪いから仕事に行くことができない	内的	潜在
(29) 今日は気分が悪いから泳ぐことができない	内的	潜在
(30) 私は足をケガしていて泳ぐことができない	内的	潜在
(31) 太郎は足をケガしていて泳ぐことができない	内的	潜在
(32) その白鳥は足をケガしていて泳ぐことができない	内的	潜在
(35) 今日は遊泳禁止の旗が立っているから泳ぐことができない	状況	潜在
(36) 便せんがなくて手紙を書くことができない	状況	潜在
(37) 明日は用事があるから郵便局に行くことができない	状況	潜在
(38) そのプールは改装中で泳ぐことができない	状況	潜在
過　　去　　否　　定		
(5) 小さいころは夜のお墓なんてこわくて行くことができなかった	心情	潜在
(24) 私はむかしは100メートルも泳ぐことができなかった	能力	潜在
(33) きのうは体調が悪いから仕事に行くことができなかった	内的	潜在
(39) きのうは便せんがなくて手紙を書くことができなかった	状況	潜在
(40) きのうは用事があって郵便局に行くことができなかった	状況	潜在
(43) きのうあの山に登ったけど、頂上までは行くことができなかった	?	実現
(44) あの本は長すぎて、最後までは読むことができなかった	能力・状況	実現
現　　在　　肯　　定		
(6) ぼくは夜のお墓でも一人で行くことができる	心情・能力	潜在
(25) 私はどんなむずかしい字でも読むことができる	能力	潜在
(27) その橋は10トンの重さまではささえることができる	能力	潜在
(34) 今日は体調がいいから何時間でも泳ぐことができる	内的	潜在
過　　去　　肯　　定		
(7) ぼくは小さいころから夜のお墓でも一人で行くことができた	心情・能力	潜在
(26) むかしはこれぐらいの字は読むことができた	能力	潜在
(41) むかしは道があって、あの山の頂上まで行くことができた	状況	潜在
(42) あのころは時間があって、高松に行こうと思えばいつでも行くことができた	状況	潜在
(45) きのうは体調がよくて、1キロ泳ぐことができた	内的	実現
(46) きのうは天気がよくて、頂上まで行くことができた	状況	実現
(47) きのう時間ができてやっと郵便局に行くことができた	状況	実現

表1　調査項目一覧

現在否定	S	O	I	I否定辞
(1) 夜のお墓なんてこわくて一人で行くことができない	○●	●	○ ■	+ +
(2) ラブレターなんてはずかしくて書くことができない	○●	●	○	+
(3) うちの妹ははずかしがりやだからラブレターなんて書くことができない	−	■	○	+
(4) 太郎ははずかしがりやだからラブレターなんて書くことができない	−	■	○	+
(8) こんな波の高い所ではこわくて泳ぐことができない	●□■	● ■	○	+
(9) あの大きな犬がいるところに来ると足がすくんでしまって先へ行くことができない	○●□■	● ■	○ □	+ +
(10) その川は汚いから泳ぐことができない	□	■	○ □	+ +
(11) 私は生れつきからだが弱くて泳ぐことができない	−	● ■	■	+
(12) 太郎は生れつきからだが弱くて泳ぐことができない	−	● ■	■	@
(13) 私は海で10メートル以上はもぐることができない	○●□	●□ |	○	+
(14) 「ユウウツ」なんていう字はむずかしくて書くことができない	○	● ■	● ■	+ @
(15) こんなに重いものは持ち上げることができない	*○●□	●□	●	+
(16) 練習しているけどまだ100メートル以上は泳ぐことができない	○● ■	●□■	●	+
(17) 人間は空を飛ぶことができない	○●□	● ■	●	+
(18) ペンギンは空を飛ぶことができない	−	● ■ |		@
(19) この橋は10トン以上の重さをささえることができない	●	●□	□	@
(20) このクレーンは30トン以上のものは持ち上げることができない	*○●	●□ |		@
(21) この鉛筆けずりはきれいにけずることができない	○●□	●□ |		@
(22) 私は道がわからないから会場まで行くことができない	○●□	● ■ |		@
(23) 太郎は道がわからないから会場まで行くことができない	−	● ■ |		@
(28) 今日は体調が悪いから仕事に行くことができない	○●□■	●□	●	+
(29) 今日は気分が悪いから泳ぐことができない	○●□■	●□■	○	+
(30) 私は足をケガしていて泳ぐことができない	○●□■	●□■ |		@
(31) 太郎は足をケガしていて泳ぐことができない	−	●□■	●	+
(32) その白鳥は足をケガしていて泳ぐことができない	●(●□)	●□■ |		@
(35) 今日は避泳禁止の旗が立っているから泳ぐことができない	−	□■ |		@
(36) 便せんがなくて手紙を書くことができない	○●□■	■ |		@
(37) 明日は用事があるから郵便局に行くことができない	○●□■	■ |		@
(38) そのプールは改装中で泳ぐことができない	−	■ |		@
過去否定	**S**	**O**	**I**	**I否定辞**
(5) 小さいころは夜のお墓なんてこわくて行くことができなかった	○●	●	○ ■	+ +
(24) 私はむかしは100メートルも泳ぐことができなかった	○●	●□	○ ■	+ @
(33) きのうは体調が悪いから仕事に行くことができなかった	○●□■	●□	●	@
(39) きのうは便せんがなくて手紙を書くことができなかった	□	■ |		@
(40) きのうは用事があって郵便局に行くことができなかった	□	● ■	■	@
(43) きのうあの山に登ったけど、頂上までは行くことができなかった	○ □	□■	■	@
(44) あの本は長すぎて、最後までは読むことができなかった	○●□	●□	■	@
現在肯定	**S**	**O**	**I**	
(6) ぼくは夜のお墓でも一人で行くことができる	○ □ ▲	□	□	
(25) 私はどんなむずかしい字でも読むことができる	□ ▲	□	▲	
(27) その橋は10トンの重さまではささえることができる	* ▲	□	□	
(34) 今日は体調がいいから何時間でも泳ぐことができる	−	□	□	
過去肯定	**S**	**O**	**I**	
(7) ぼくは小さいころから夜のお墓でも一人で行くことができた	* ▲	□	□	
(26) むかしはこれぐらいの字は読むことができた	○ □ ▲	●	□	
(41) むかしは道があって、あの山の頂上まで行くことができた	*○ ▲	□	□	
(42) あのころは時間があって、高松に行こうと思えばいつでも行くことができた	○ □ ▲	□	■	
(45) きのうは体調がよくて、1キロ泳ぐことができた	* □	□	○	
(46) きのうは天気がよくて、頂上まで行くことができた	*○ □ ▲	□	○	
(47) きのう時間ができてやっと郵便局に行くことができた	□	□	■	

○ ヨーカカン　● エーカカン　□ カケン　■ カケレン　▲ ケッコーカク　| カカレン（否定辞はン、動詞はカクで代表）
（否定辞：Iのみ）+ ン(カッタ)　@ ヘン(カッタ)　(− NR　* 異なる動詞を使用　_「不自然」と内省）

表2　調査結果一覧

(d)の調査項目については、具体的な調査文を表１に記した。これらの項目は、(d-1)「可能の条件」、および、(d-2)「動作実行の含意」、という二つの意味特徴に注目して設定したものである。(d-1)「可能の条件」については、「心情」(動作主体（話し手）の心情による可能・不可能)・「能力」(動作主体の能力による可能・不可能)・「内的条件」(動作主体内部の一時的な状態による可能・不可能)・「状況」(動作主体外部の条件による可能・不可能）の四つにわけ、また(d-2)「動作実行の含意」については、動作の実行を含意しない「潜在系可能」と、動作の実行を含意する「実現系可能」((45)-(47))の二つにわけた。実行の含意を基準とする潜在系可能と実現系可能の区別は、過去否定文の場合、所与の目的が達成されなくても、動作の発動が実際にあったかどうかということが区別の基準となるのかもしれないが、方言一般について、動作の発動という意味特徴が可能形式の使い分けにどのように関与するかについては、まだ不明な点が多い。

3. 分析

調査結果を表２に示した。以下、分析に入る。

インフォーマント３名の結果には、年齢や外住歴、調査法等を反映したと思われる多様な相違点が観察されるので、それぞれの用いた可能形式の意味・用法について、インフォーマントごとに、Ｓ、Ｏ、Ｉの順で個別的に分析を進めることにする。分析に際しては、

（§ 3.x.1）副詞エー・ヨー

（§ 3.x.2）副詞ケッコー

（§ 3.x.3）可能動詞（書ケルなど)、可能動詞＋レル（書ケレルなど）

（§ 3.x.4）混交形式

などの可能形式に注目するほか、

（§ 3.x.5）否定辞

についても簡単に考察を加える（ｘは、Ｓ＝１、Ｏ＝２、Ｉ＝３)。

3.1. Ｓ（壮年層男性、生え抜き）

3.1.1. 副詞エーとヨー

Ｓの副詞エーと副詞ヨーの使用実態をまとめると、次のようになる。

(a) 主として心情、能力可能の否定文において使用される。状況可能や肯定文等で用いた場合には不自然な文になるとの内省が得られた。

(b) 副詞エーの用法はほぼ副詞ヨーの用法に対応しているが、副詞エーは否定文に限定されるという特徴がある。副詞エーは反語文のなかで使われることもない（以下、例文の前の番号は調査文番号。面接調査は番号順に行った)。

(3) ヨースルカイナ/ ＊エースルカイナ（反語）

この適格性判断はＳには明確なようで、(6)「ぼくは夜のお墓でも一人で行くことができる」、

(26)「むかしはこれぐらいの字は読むことができた」など、ヨーが不自然ながら使用可とした項目でも、副詞エーは不適格と判断している。なお、副詞ヨーは子供のことばであるとの内省を得たが、S自身がヨーを回答していることとの関連はよくわからない。

(c) 副詞エーとヨーのいずれも、実現系可能肯定文（(45)-(47)）に使用することはないと思われる。(46)では次のようにヨーが回答されているが、若干問題がある。

(46) きのうは天気がよくて、頂上までヨーイテキタワ/ ＊ヨーノボッタ

この項目でSは、ヨーノボッタは非文と判断したが、ヨーイテキタワとすると適格になるとした。しかし、ヨーイテキタワのヨーが可能のヨーなのかどうか、またイテキタがどのような動作の特性を表すのか、さらなる検討が必要である（次項も参照）。なお、(42)でも、次のような回答が得られた。

(42) あのころは時間があって、行こうと思えばいつでもヨーイテキタ

3.1.2. 副詞ケッコー

副詞ケッコーは、この地域に特徴的な肯定可能形式である。Sの場合、(46)で不自然ながらその使用を回答した以外には、潜在系可能の肯定文に使用している。

(46) きのうは天気がよくて、頂上まで ？ケッコーイテキタワ

なお、(46)については、やはりイテキタワという動詞が使われており、(41)「むかしは道があって、あの山の頂上まで行くことができた」では、ケッコーイテキタワのほか、イケテタ（表2からは除外）という回答も得た。

3.1.3. 可能動詞と可能動詞＋レル

肯定文では可能動詞のみを使用し、過去否定では可能動詞＋レ＋ナンダよりも可能動詞＋ナンダを多用している。両形式に意味的な使い分けがあるかどうかは不明である。

3.1.4. 混交形式

(32)のエーオヨゲンのみ（表2ではカッコに入れて表示）。書ケレルなどの可能動詞＋レル形も、その起源は混交にあるのかもしれないが、ここでは触れない。以下同様。

3.1.5. 否定辞

現在否定でン、過去否定でナンダを専用している。ンカッタは都会からもどってきた人や高校生に使用されるとの内省があった。なお、S自身は、調査項目とは別の談話のなかでヨーセーヘンを使っている。

3.2. O（壮年層女性、移住者）

3.2.1. 副詞エーとヨー

Oの場合、副詞エーを専用しており、ヨーの使用はない。副詞ヨーは、現在の居住地である愛媛県新居浜市で使用するとの内省があり、両形式を地域に応じて使い分けているということになる。

意味的に見ると、副詞エーは、一般に、心情・能力・内的条件可能に使われている。例外は(3)「うちの妹ははずかしがりやだからラブレターなんて書くことができない」(心情)、(4)「太郎ははずかしがりやだからラブレターなんて書くことができない」(心情)、(10)「その川は汚いから泳ぐことができない」の３項目であるが、(3)(4)は三人称の文である点で前後の調査項目とは異なる。三人称の場合、大阪などでも副詞ヨーの使用度が下がることがある（渋谷1993:ch.3)。(10)はもともと、心情、状況の二義的な文であり、Oの場合、後者の意味で捉えたものであろう。

なお、(26)「むかしはこれぐらいの字は読むことができた」でエーヨンダと回答しているが、肯定文で使われた副詞エーはこの例だけであり、これをどのように解釈してよいかはよくわからない。移住によって過剰一般化が起こったとも考えられる。

3.2.2. 副詞ケッコー

回答なし。

3.2.3. 可能動詞と可能動詞＋レル

当該二形式については、Oの使用は、(a)形態的に条件づけられている場合と（Sも同様)、(b)意味的に条件づけられている場合の、二つのタイプがある。

まず、(a)形態的に条件づけられているのは、一段動詞とラ行五段動詞の場合（モグル・ササエル・持チ上ゲル・削ル）で、この場合には排他的に可能動詞が使われる。つまり、高知に見られるような、モグレレンなどレが二つ重なった形式はここでは使われないということである。この制約と関係してか、(13)に、可能動詞と併用で、モグラレンという形式を回答している。

一方、(b)の意味的な使い分けは、泳グ（7:12）や行ク（3:6）など、同じ動詞について両形式が用いられている例から理解される（カッコ内の数字は、前者が可能動詞、後者が可能動詞＋レルの数)。これらの動詞の場合、たとえば次の例のように、動作主体内部に理由がある一時的な不可能(内的条件可能)を言うときに可能動詞が使われやすくなるという傾向がある(例外は(16)(35)(24)など)。

(28) 今日は体調が悪いから

(29) 今日は気分が悪いから（可能動詞＋レルと併用)

(30) 私は足をケガしていて（同)

(43) きのうあの山に登ったけど、頂上までは (同)

可能動詞と可能動詞＋レルでは後者のほうが新しいが (§ 3.3.3)、前者がよりモーダルな意味を表すものとして、その使用範囲を内的条件可能に限定されていると考えられる。可能の意味のモーダルな階層 (心情＞内的・能力＞状況、左のものほどモーダルな意味が強い) に対応した形式使用が行われているといってよい。古い形式、衰退する形式ほど階層の左の意味にずれこみやすくなる (古形のモーダル階層上昇の原則)。なお可能動詞＋レルは、(1) (2) など、典型的な心情可能には使われないほかは、九州北部の可能動詞などと同じように (陣内 1996)、意味に関する限定は特にないように見える。

その他、書ク・飛ブには排他的に可能動詞＋レル形が使われているが、これらの動詞については内的条件可能の項目を設けていない。

3.2.4. 混交形式

回答なし。

3.2.5. 否定辞

ン・ナンダを専用。

3.3. I (活躍層女性、外住歴あり)

3.3.1. 副詞エーとヨー

I の場合、単純否定において、

(a) 副詞ヨー＝ ((29) の一時性のものを含む) 心情的

(b) 副詞エー＝客観的能力的

といった、心情性の有無によってほぼ使い分けられているといえる。このことは、一見、§ 3.2.3 で述べた古形のモーダル階層上層の原則に違反するように見えるが、かつての居住地である大阪の、ヨーの用法が影響を与えたのかもしれない。大阪のヨーは心情性が強い。また (45) (46) で副詞ヨーを実現可能にも使用しているが、これは、大阪方言のヨーの過剰一般化かとも考えられる。大阪方言では、副詞ヨーを実現可能に使うことはまれである。

3.3.2. 副詞ケッコー

(25) 「私はどんなむずかしい字でも読むことができる」 (潜在系能力可能) で１例のみ使用している。これは、S の用いたケッコーの用法の範囲内のものであるが、I がケッコーを生産的に使用するのかどうかはわからない。

3.3.3. 可能動詞・可能動詞＋レル・助動詞 (ラ) レル

現在否定で大阪型の助動詞 (ラ) レルを多用し、過去否定で (39) のカカレヘンカッタ以外、

可能動詞＋レ＋（ヘ）ンカッタを使用するという実態である。また、可能動詞と可能動詞＋レルでは、どちらかといえば、肯定で前者が、否定で後者が優位にある。なお、可能動詞＋レル形が肯定でも使われるのは、Ｉのみである。両形式に意味的な使い分けがあるかどうかはよくわからない。

ここで、当該三形式使用をめぐるＳとＩの違いを、類型的にまとめてみよう。次のようになる（動詞書クで代表。二形式が併用される場合、左の形式が新）。

	現在否定	過去否定	現在肯定
壮年層（Ｓ）	カケレン・カケン	カケレナンダ・カケナンダ	カケル（・ケッコーカク）
活躍層（Ｉ）	カカレヘン	カカレヘンカッタ・カケレンカッタ	カケレル・カケル

可能形式をめぐっては、新形式は現在否定から使われ始めるといった傾向が観察されるが（渋谷 1993：ch.25）、カケレン、カカレヘンなどについてはここでも当てはまる。壮年層Ｓでは可能動詞＋レル形（カケレナンダ）がようやく過去否定にも進出し、逆に可能動詞（カケナンダ）が複合残存として残った状態、また活躍層Ｉではさらに助動詞（ラ）レル形（カカレヘンカッタ）が過去否定に進出し、可能動詞＋レル形（カケレンカッタ）が複合残存的に残った状態だとみなすことができよう。また、壮年層Ｓの現在肯定に可能動詞＋レル形（カケレル）がないことに注目すると、新しい可能形式のパラダイム内伝播は、

現在否定　→　過去否定　→　現在肯定

といったルートで進むということができそうである。

3.3.4. 混交形式

回答なし。

3.3.5. 否定辞

副詞エーとヨーについては、(33)のエーイカヘンカッタ以外はン専用である。一方、その他の形式については、(11)まで（(1)(5)(9)-(11)）がン、それ以外はすべてヘンである。調査法に問題をかかえたところである。

4. 理論的な問題

最後に、当該調査から抽出される理論的な問題についてまとめておこう。言語変化の問題と、調査法の問題の２点について述べる。

4.1. 言語接触と文法変容

まず、言語接触によって引き起こされた可能性のある文法体系の変化について、整理してみ

よう。

(a) 移住による文法体系の変化

副詞エーとヨーの使い分けに注目したとき、S・O・Iの間には次のような相違があった。

S：副詞エーが否定に限定される以外、顕著な使い分けなし

O：使用地域による使い分け

I：意味による使い分け

このうち、生え抜きのSには見られない、Oの地域による使い分けが、Oの移住というできごとによって生じたものとみなすならば、移住は、形式使用をめぐるメタ意識を単純化（合理化）させることがあるということになる。ただし、SももともとOと同じように副詞エーを専用していたものが、その後、仕事を行うなかで他の方言と接触するうちに、副詞ヨーを獲得したということも考えられないわけではない（大西拓一郎氏の指摘による）。もしそうだとすればSについては、言語接触によって体系が混沌化したということになる。なお、自然談話データを収集した当該調査地域に居住するほかの壮年層2名も、副詞エーと副詞ヨーのいずれをも使用している。

また、Iの、意味による使い分けについても、移住という経験がもたらしたいわゆる棲み分け（合理化の一、徳川 1978）とみなすことができるかもしれないが、他方では、Iの移住ということとは関係なく、Sの混沌状況が、I（の世代）において、大阪方言の影響を受けながら、整理された結果だと考えることもできる。

(b) 移住による形式の消滅

Oについて、Sとは対照的に、ケッコーの使用がないことが注目される。もしOが、移住前にこの形式を用いていたとすれば、Oには、保持された形式（副詞エー）と、保持されなかった形式（ケッコー）があるということになる。もしそうだとすれば、この維持・消失の違いが両形式のどのような特徴によるものなのか、これまで語彙について考えられてきたのと同様に、文法レベルについても検討する必要があろう。副詞ケッコーとエーの場合には、可能文に見られる否定の優位（渋谷 1993:ch.25）ということと関係があると思われる。

以上二つの問題を考察することは、将来の方言文法記述調査においてどのようなインフォーマントを選ぶかなど、大事な問題を解決するのに寄与するであろう。Oの副詞エーがその可能性をもつように、文法領域によっては、移住者を対象とするほうが、伝統的な体系を記述できる可能性があるわけである。

4.2. 文法調査法の問題

次に、今回の調査で出てきた文法体系調査をめぐる調査法の問題点をまとめておこう。次のような問題があった。

(a) インフォーマントにとっての不自然な調査文。面接調査を行ったSに、無回答（表2の「－」）や動詞の変更（表2の「＊」、たとえば行ク→行テクル、書ク→スル、持チ上ゲル→持

ツ、ツル、巻キ上ゲルなど）が多かったが、その理由のひとつはここにある。よく指摘されるように、「海で泳ぐ」習慣がないといった、生活環境と関連する問題、「持ち上げる」といった日常的に使用しない動詞の問題などが、その不自然さをもたらした要因である。今回行ったアンケート調査では、このような問題は生じなかった。

(b) 関連して、同じ意味領域について多数の項目を尋ねる際の、インフォーマントの、「この意味分野について聞かれている」というメタ意識を、われわれ調査者がどのようにして活性化するか（できるか）という問題がある。(a)の問題は、(b)の解決法を考えることによって、ある程度回避できるものと思われる。今回は試みに、似た意味の項目を意図的にまとめてみた。

(c) 集中度。文法体系調査には、

(c-1) 抽象的な内容のことを多く尋ねる。

(c-2) 似た内容のことを多く尋ねる。

(c-3) さらに面接調査の場合には、終わりが見えない。

といったマイナスの条件を備えているために、インフォーマントには敬遠されることが多い。今回の調査所要時間は、壮年層の場合、S（面接調査）58 分、O（アンケート調査）45 分であるが、Sは 20 分を越えたあたりから、「むずかしい」「あとどれぐらいか」といった反応をよく見せるようになった。一方Oは、途中に雑用を挟みながら、特にコメントもなくすべての設問に答えている。

(d) 併用回答は望ましいか。面接調査で、答えがでない場合の誘導を、文法調査においてはどの程度行うべきかということと関連した問題である。今回の調査の場合、副詞エーの記述にひとつの焦点を置いたので、副詞エーを使用した文の適格性についてはほとんどの項目で確認しているが、それ以外の形式については任意とした。その理由は、ひとつには調査全体の時間がかかりすぎるという問題と、誘導した場合、可能の条件に応じてどの形式を使用するかということよりも、誘導した形式そのものを（どのような可能の条件であれ）使用するかどうかという局所的な問題に意識が向いてしまったというケースが調査の最初のほうにあったからである。これも、(b)の問題と関連しよう。

(e) 以上は面接調査のデメリットであるが、逆に面接調査のメリットには、調査項目以外の文をその場で作ることによって、生産性を確認できること、また、不自然さを確認できること、といったことがある。渋谷(1994)などではこの方法が効果的に働いた。

5. まとめ

以上、本稿では、徳島県海部郡方言の可能表現について、特に副詞エーの用法に注目して分析を加えた。またあわせて、言語変化と移住の問題、調査法の問題を検討した。

今回の調査には、談話資料を録音するという目的もあったので、可能表現の調査は網羅的には行っていない。記述面では活躍層生え抜きの副詞ヨーの問題、また調査法・調査対象面では、表３の「－」を補う必要がある。

	生え抜き		移住者		帰郷者	
	壮年	活躍	壮年	活躍	壮年	活躍
面接	S	−	−	−	−	−
アンケート	−	−	O	−	−	I

表３　調査計画一覧

いずれも今後の課題としたい。

* 本稿は、1999 年度、国立国語研究所の研究課題「方言文法の記述とその通時的解釈に関する基礎的研究」によるものである。

【参考文献】

渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』 33-1

――― （1994）「鶴岡方言のテンスとアスペクト」国立国語研究所報告 109-1『鶴岡方言の記述的研究－第３次鶴岡調査 報告１－』秀英出版

陣内正敬（1996）『北部九州における方言新語研究』 九州大学出版会

徳川宗賢（1978）「単語の死と生 方言接触の場合」『国語学』115

しぶや　かつみ（大阪大学大学院文学研究科）

sbj@let.osaka-u.ac.jp